

東洋学・アジア研究連絡協議会

シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究」

—東洋学・アジア研究の新潮流—

東洋学・アジア研究連絡協議会
会長 齋藤 明

日本の東洋学・アジア研究の衰退の危機が指摘されて、すでに久しい時間が経過しました。2015年6月には、文部科学大臣より人文・社会科学系の学科・学部の統廃合を進めるという通知も出され、日本学術会議や多くの大学・研究機関でも様々な対応に追われてきました。

このような危機の到来は、東洋学・アジア研究分野の研究者一人一人に、自己の学問のあり方を根本的に再検討しつつ、この危機を克服し関連する学問の新たな振興をめざすべきことを迫るものであります。それとともに、自らの学問的ディシプリンや所属する研究機関・学協会の相異を超えて、多くの研究者が相互に連携・協同しあいながら、これに立ち向かっていくべきことを教えてもいます。

今日、このような危機を克服する方策として、以下のことが重要ではないかと思われまます。日本の東洋学・アジア研究は、近代的学問を相対化して、東洋・アジアの文化的諸価値を、時空を超えた世界の普遍的真理という一色の絵具で塗りこめないという長所を持ちつづけてきました。こうした長所を活かしながら、

- 一、21世紀に生きる人間としての共通の視点に立って、東洋・アジアにおける個別的な文化現象の諸価値を内在的に再構成すること。
- 二、こうした個別的な文化研究の積み重ねを総括する中で、東洋・アジアから世界に向かって発信する新たな人間科学 (Human Sciences) を興こすこと。

これらを実現する道を切り拓いていくことが重要なのではないのでしょうか。

私たち、約40の学協会は、2004(平成16)年9月、東洋学・アジア研究連絡協議会を設立しました。その目的は、東洋・アジアの諸文化を各種のディシプリンをもって研究する学協会が、将来におけるこの学問の一層の振興を図り、そのために相互の学術交流と連絡協議を行い、また国際的な東洋学・アジア研究の動きにも対応すること、などにありました。

東洋学・アジア研究連絡協議会は、以上の設立趣意と現状への課題意識に基づき、模索のための具体的な活動の一環として、2013(平成25)年12月からシンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして」を5年間に亘って開催しました。2019年度から新たに「近未来の東洋学・アジア研究」を表題として掲げ、本年度は近年目ざましい研究上の新動向に焦点をあて、下記の要領でシンポジウムを開催いたします。

シンポジウムの講師は、近年、各分野において活発な研究活動を展開し新たな地平を切り拓こうと努めておられる先生方をお願いしました。

研究者・学生・市民のみなさん、お誘いあわせのうえ、ふるってご参加下さい。

シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究—東洋学・アジア研究の新潮流—」

日時：2022年12月3日（土）13時30分～17時30分 会場：東京大学法文2号館1番大教室

※対面形式で開催する予定ですが、新型コロナウイルスの感染状況によってはオンライン会議に変更いたします。

変更時は、11月25日（金）までに東方学会HPにその旨を掲載し、またお申し込みのメールにご連絡いたします。

聴講無料。お申し込みは右のQRコードから、または氏名・所属・メールアドレスを添えて
webkaigi@tohogakkai.com まで。11月末日締切。（変更時、URLは12月1日に送信予定。）



開会挨拶：斎藤 明（国際仏教学大学院大学教授、東洋学・アジア研究連絡協議会会長）

総合司会：守川知子（東京大学准教授）

報告：西田祐子（大阪大学招聘研究員）：唐代における「羈縻」概念と「羈縻州」再考—『新唐書』の再検討を手掛かりに—

福嶋亮大（立教大学准教授）：中国現代思想の潮流—天下主義と本土主義—

内記 理（京都大学助教）：文明の十字路口からアジアを眺める—ガンダーラの歴史と文化の研究から見えてくるもの—

高橋晃一（東京大学准教授）：XMLによる仏教用語の語彙集の利活用—バウツダコーシャの事例—

大塚 修（東京大学准教授）：アラビア文字写本研究の新潮流と東洋学アジア研究

栗田禎子（千葉大学教授）：日本学術会議「アジア研究・対アジア関係に関する分科会」第25期活動より

閉会挨拶：岸本美緒（お茶の水女子大学名誉教授）

〔報告レジュメ集〕

西田祐子：唐代における「羈縻」概念と「羈縻州」再考—『新唐書』の再検討を手掛かりに—

唐代史の分野では、唐帝国の統治体制を説明する際に、従来しばしば「羈縻」という概念を基本的なキーワードの一つとして取り扱ってきた。本発表は、こうした「羈縻」または「羈縻支配」「羈縻州」という概念や存在に対し、唐代史研究の基本史料である『新唐書』への詳細な分析を手段の主軸としながら再検討をおこない、唐代当時の「羈縻」が実際にはどのようなものであったのかを可能な限り明らかにしようとするものである。

福嶋亮大：中国現代思想の潮流—天下主義と本土主義—

21世紀中華圏の思想はさまざまな顔をもつが、大きな傾向としては「政治的転回」が生じ、イデオロギー的な色彩が強くなったことが指摘できる。特に2010年代になると、中国では一帯一路構想が提唱され、香港では中国化に反発する動きが鮮明になった。政治的現実がいっそうシビアなものになってゆくなか、思想はどこに向かうのか。本発表では中国の天下主義および香港の本土主義を両極としつつ、それらの思想史的な位置づけについて、大まかな下絵を描くことを試みたい。

内記 理：文明の十字路口からアジアを眺める—ガンダーラの歴史と文化の研究から見えてくるもの—

古代以来、文明の十字路口としての役割を担ったガンダーラ（現在のパキスタンおよびアフガニスタンの一部）の歴史と文化を研究することは、日本を含む東アジアの歴史と文化を理解する上でも重要である。本発表では、ガンダーラで生み出された、ガンダーラ仏教彫刻やカロシュティー文字に着目し、それらに対する分析が、より東方の地域における歴史と文化の理解にどのように影響するかについて、具体例を交えながら紹介する。

高橋晃一：XMLによる仏教用語の語彙集の利活用—バウツダコーシャの事例—

仏教学では電子テキストを作成することは当然のことになっている。しかしながら、こうした電子テキストの多くは、単純な文字列で構成されており、電子テキストの利点を十分に活かしているとは言えない。コンピュータで処理することを前提に電子テキストを構築する場合、XMLを用いることで、応用の幅は格段に広がると考えられる。本発表では、仏教用語の用例集であるバウツダコーシャのデータ構築を例に、XMLによるテキストの電子化の意義と今後の展望について考える。

大塚 修：アラビア文字写本研究の新潮流と東洋学アジア研究

報告者が研究を志した頃、世界各国の図書館に所蔵されるアラビア文字史料の写本にアクセスすることは難しく、写本を研究に用いることは一般的ではなかった。しかし、ここ20年間で写本研究をめぐる環境は大きく変わった。特に、近年の写本のデジタル化とオンライン公開の促進は写本へのアクセスを容易にし、写本を用いた研究が数多く世に出されるようになってきた。本報告では、報告者の研究を事例に、アラビア文字写本研究の意義と問題点について考察したい。